

大蔵虎明本狂言集における希望表現について

柴田 昭二
連 仲 友

目次

- 一、はじめに
- 二、希望表現の構成形式
- 三、各形式の用法
- 四、おわりに

一、はじめに

本稿は、別稿^①を受け、大蔵虎明本狂言集（以下、「本書」と略称する）を研究資料として、それにおける希望表現^②の実態を解明しようとするものである。

虎明本は、大蔵虎明（慶長二一（一五九七）年から寛文二一（一六六二）年）の手になる狂言台本の集成である。全八冊からなり、二、三、六番の本狂言を所載する。寛永一九（一六四二）年に父虎清の奥書加判を得て完成した。序文に「おやにならひしこと、もをわすれしとかきし物なり」とあり、父大蔵虎清（永禄九（一五六六）年から正保三（一六四六）年）の教えを後世に伝えるべく、登場人物のせりふを中心として、場面、しぐさなどを忠実、詳細に記述している。虎明の、伝統を重んじる姿勢の表れと見ることができる。原本は代々の大蔵家に伝えられ、現在に至る。本書は狂言の定着期としての室町後期から江戸初期の言語、特に当時の口語を考察するにあたって重要な資料であり、そこに見られる希望表現の解明は、当時の日本語の実態と変遷の解明にも寄与するものと考えられる。

テキストには、池田廣司、北原保雄著『大蔵本狂言集の研究 本文篇』（表現社本文篇上 昭和四七年八月、本文篇中 昭和四八年七月、本文篇下 昭和五八年九月発行）を用いる。その底本には笹野堅編『古本能狂言集』（影印版）を用いている。

用例の引用に際し、テキストにおける符号「」はせりふの始まりを示し、「へ」は節付けを示し、「（）」は説明などの書き入れを示す。なお、読みにくい語

句には漢字をルビにして（ ）を付して示した。

二、希望表現の構成形式

「本書」における希望表現と認められる構成形式とそれぞれの用例数は以下の通りである。

「まほし」	(二例)
「たし」	(三二七例)
「ばや」	(一〇九例)
「もがな」	(四例)
「なむ」	(一例)
「かし」	(三五例)
「たまへ」	(一三例)
「ほし」	(四一例)
「ほつす」	(三例)
「欲」	(二例)
「ねがふ」	(一七例)
「願」	(二例)
「のぞむ」	(二四例)
「望」	(二八例)
「いのる」	(一〇八例)
「祈」	(三二例)

以上から見られるように、希望を表す助動詞では「まほし」と「たし」がとも

に用いられるが、量的に「たし」が圧倒的に多い。終助詞では「ばや」「もがな」「なん」「かし」が見られるが、量的に「ばや」がはるかに多い。慣用形式として神仏貴人に対する「たまへ」、形容詞では「ほし」、動詞では「ほつす」「ねがふ」「のぞむ」「いのる」が見られ、そのうち字音の熟語形式がそれぞれ含まれる。

なお、本書において動詞「こふ」「もとむ」「あつらへる」の用例も見られるが、「暇乞いする」、「買い物する」、「注文する」のような希望表現と異なる意を表す用法であるため、本稿では扱わないことにする。

三、各形式の用法

1、「まほし」の用法

まず、「まほし」の用法を見る。本書に「まほし」は二例見られる。

(1) (妻)へ法師がは、はたゞひとり、なみたにむせぶばかりにて、おやのもとへぞかゝりける。(夫)へきかまほしの御声や、あれはつまにてましますか、さりとはかへりあひ、きやうきをやめてたび給へ。

(女狂言の類ほうしがは、中三二頁)

(2) (茶屋)へむかしからいひおいた事が有程に、是を申さう。(参詣人)へそれこそきかまほしけれ、(集狂言之類)やるこ 下九六頁

例(1)(2)は登場人物のせりふにおける用例である。例(1)は節付けで「聞きたかつた声だ。」の意を表し、希望表現の下位分類の「願望⁽³⁾」を「説明⁽⁴⁾」する用法である。例(2)は「それこそ聞きたいものだ。」の意と解され、「願望」を直接「表出⁽⁵⁾」する用法である。なお各冊の冒頭にほぼ同文の虎明の序文が置かれ、「それる人こそあらまほし」と結ばれるが、「まほし」が書記言語として用いられることを示す例として、用例として数えない。

2、「たし」の用法

次に、「たし」の用法を見る。本書に「たし」は三一七例見られ、そのうち派生語「たさ」が四例、「たがる」が一四例含まれる。ほとんどがせりふの用例であるが、一例のみ注意書きでの用例が見られる。

(3) (売手)へ都に人おほいといへども、某が、すゑひろがりやの亭主でおりやるよ。(太郎冠者)へそれは誠に仕合で御ざる、さらは追付かいましたい

(脇狂言之類)すゑひろがり 上七〇頁

(4) (伯父)へもはやあらへと云たほどに、いそひでりやうりをおこのみやれ(甥)へさらはりやうりをこのみませう、うちみでたべたひ

(集狂言之類)すゞきばうちやう 下一一六頁

(5) (大名)へやい太郎くわじや、さる引にいていはふずるは、はじめてあふていふはいかなれ共、むしんをいひたひ事があるが、きいてくれうか、

(大名狂言類)うつぼざる 上二五八頁

(6) (法華僧)へ申御ざるか(亭主)へ何事でおじやるぞ(法華僧)へあの出家とひと所にいとふもなひ程に、別の間があらは、かしておくりやれ

(出家座頭類)中四〇六頁

例(3)へ(6)はすべてせりふにおける用例である。例(3)(4)は、「それでは扇をすぐにお買いたしたい。」「淀一番の鯉を刺身で食べたい。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。例(5)(6)は、「金の無心をしたのだが、」「あの僧と一緒に居たくないのぞ、」の意と解され、「願望」の「説明」を表す用法である。これらの用例は多数用いられ、本書の希望表現の常套といえる。

(7) (願礼)へかやうに候者は、都方より出たる願礼にて候、此度思ひ立、同行あまた友なひ、立山せちやうと心さし候、又是なるにやくぞくも、まいりたきと申され候ほどに、ともなひ申、おのく罷下り候

(鬼類小名類)くも 中四三頁

(8) へ当山と申は、かうれい天皇の御宇に、日本にこがねのお山をつきたきと思しめし明暮御念願被成候所に

(万葉類)吉野マフデ 下一八六頁

例(7)(8)は助詞「と」を介して「申す・思しめす」に続く文末相当の用例である。係り結びとは無関係で、連体形で終止する用例であり、霊山・天皇に対する敬意が感じ取れる点に共通するものがある。「ここにいる若者も参詣いた

したいと申しますので、「我が国に金のよな山寺を築きたいとお思いになり、」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

(9) (亭主) へ心得である(へ何ものぞ、みたひと云て、はしが、りにいて、二人ながらとをす、)

(集狂言之類 連歌盗人 下二九頁)

(10) へなることのことく云付て、子供をやりたけれども、あそこはきつねづかと云て、めいよばかすきつねが有程に、汝らをやる、

(鬼類小名類 きつねづか 中一三八頁)

例(9)は、やや小さな字を用い、異なるせりふや演じ方の説明を書き加えた用例である。このような、せりふ、場面や演じ方などを記す記述は多く見られる。亭主のせりふに加えるもので、「何者か見てみたい。」の意を表し、「願望」を「表出」する用法である。例(10)は、他の演目の冒頭の部分を引き合いにし、太郎冠者、次郎冠者の演ずることを説明している内容であり、せりふ以外の希望に関する表現である。「子供で演じたいのであるが、」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

(11) (若衆) へわかひしゆうの申さる、は、こなたへおちごさまのおいでじやと申程に、さかづきがたべたひと申てまいられてござる

(脇狂言之類 老武者 上一三七頁)

例(11)は、せりふの用例であり、対象を「が格」で示す用例である。「盃をいただきたい。」の意と解され、これも「願望」を「説明」する用法である。

(12) (主) へおのれがさやうにいひをるもすひした、ふせりたさじやあらふ、それいふせれ

(鬼類小名類 くらままいり 中六六頁)

(13) (妻) へなかく、こなたにいつも御目にかゝりたひと申されて御さる、その執心がのこつて、ま見えられたと存る程に、跡をとむらふてくだされひ(師匠) へ尤でござる、私もあいたさに是までまいつたれ共、そのかひも御さなひ、此上はなげきてもかなはぬ事じや程に、とむらひ申さう

(女狂言之類 ぬし 中二八九頁)

(14) (貸手) へはやうよふなつたな(借手) へこのしやく状を取かへしたさに致たに、しやくせんをすらりとすまひて、なふうれしや

(集狂言之類 むねつき 下一〇七頁)

例(12)(13)(14)は接尾語「さ」を付した派生語である。例(12)は「横になつて休みたいからである。」の意で、他者の「願望」を「説明」する用法である。例(13)(14)は「私もあの方に会いたくてここに来たのだが、」「この借入書を取り返したくて芝居をしたのだが、」の意と解され、二例とも話者自身の「願望」を「説明」する用法である。

(15) (親) へもんぐわいへいて、こしらへさせう、こひく(簪) へかしこまつてござる(親) へそうじてむこ入には、人がみたがる物じや程に、かきからもどこからもぞかうほどに、かまひてをくするな、

(簪類山伏類 二人袴 上三九一頁)

(16) (浄土僧) へべちの間がなひとおしやるに、からふといふはじやうがこはふなひか(法華僧) へわごりよが一所にいたがるがじやうこはひは

(出家座頭類 しろうん 中四〇七頁)

(17) (へ常のことくの簪入のやうに名乗りて、舟わたりむこのことくい立、名乗も同じ事也、さりながら、むこいと申せは、みな人が見たがるによつて、はれいな、始がせんじやが、自身たるを持て参るぶんはくるしうもなければ、)

(簪類山伏類 樽簪 上三六四頁)

例(15)(16)(17)は接尾語「がる」を付して第三者の希望を表す用法である。

例(15)(16)はせりふにおける用例であり、例(17)は説明の書き入れにおける用例である。例(15)は、同様の場面での親のせりふとして定型的な言葉遣いで表現されたものであり、「一体に婿入りの様子を人は見たがるものなので、」の意、例(16)は、「あなたが一緒に居たがるのは強情というものだ。」の意、例(17)は、冒頭でしぐさを説明しながら、例(15)と類似のせりふに入っていく様子と捉えることができる用例であり、いずれも他者の「願望」を「説明」する用法である。

3、「ばや」の用法

次に、「ばや」の用法を見る。本書に「ばや」は一〇九例見られる。

- (18) へおうぢも此こひかなはずば、いかなる、いどの中へも、みぞの中へも身をなげて、あをきおにとは系ならずとも、あをきかゝるともならばやと、思ひさだめて候、
(女狂言之類 枕物狂 中二二六頁)

- (19) (住持) へ是は此寺のぢうじで御ざ有、明朝はれがましき客来の候程に、野中の清水へ水をくみにやらばやと存る、しんばちいたかやい
(女狂言之類 お茶の水 中二四二頁)

例 (18) は節付け部分における用例である。「青い蛙にはなりたいたと決心しております。」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。例 (19) はせりふにおける用例である。「野中の清水へ水を汲みにやらせたいと思う。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

本書においてこのような希望表現を表す用例は多くなく、むしろ次のような希望表現から変化して、意志を表現するのが主な用法となっている。

- (20) (加賀の百姓) へまかり出たる者は、加賀の国のお百姓で御ざる、毎年大晦日さかいにもつてまいり、元日上とうへあがる、じつさうばうのきくさけで御ざる、きのめたうげの大雪にさ、へられ、只今もつて罷上る、いそひでもつて罷のばらばやと存る
(脇狂言之類 餅酒 上四二頁)

- (21) (大名) へ罷出たる者は、洛中に住居いたす者じや、此間は何方へもゆさんにまいらぬほどに、今日は罷出てなくさまばやと存る
(大名狂言類 はぎ大名 上二九五頁)

- (22) (山伏) へ是は出羽のはぐる山より出たる山ぶしにて候、大峯かつらを仕てかけてござる、急で本国へくだらばやと存る
(智類山伏類 柿山伏 上四一六頁)

- (23) (酔売) へ罷出たる者は、都にかくれもなきすうりにて候、本日は天気もよく候程に、商売に出て候、急でうらばやと存る、

(集狂言之類 酔はじかみ 下 七五頁)

例 (20) (23) は演者が登場する際に名乗るせりふにおける用例である。「急いで行こうと思う。」「慰労しようと思う。」「急いで地元に戻ろうと思う。」「早く売ろうと思う。」「の意を表し、いずれも本来の願望の意から変化して、行動の伴う意志を表す用法に転じたものと考えることができ。本書における「ばや」はほとんどこの用法である。

4、「もがな」の用法

次に、「もがな」の用法を見る。本書に「もがな」は四例見られる。

- (24) (越前) へそれは日本一の事で御ざる、只今ひとり事にも、よひつれもがなと申て御ざるが、幸の事おとも申さう、さらはかう御ざれ
(脇狂言之類 餅酒 上四三頁)

- (25) (浄土僧) へやれくうれしや、某も一人にてさびし程に、よひつれもがなとぞんずる所に、さいわひの事、同道いたさう
(出家座頭類 しうろん 中四〇三頁)

例 (24) (25) はせりふにおける用例である。いずれも「よい連れがほしいものだ。」の意を表し、「願望」を「説明」する用法である。

- (26) (越前) へおほそらに、はかるほどの餅もがな、いけらふいちこかぶりくらはむ
(脇狂言之類 餅酒 上四七頁)

- (27) (太郎冠者) へなげばこそ、わかれもうけれ鳥のねの、きこえぬ里のあかつきもがな
(鬼類小名類 けいりう 中一〇七頁)

例 (26) (27) は和歌における用例である。「広い大空にいっぱいになるほど大きな餅がほしい。」「鳥の鳴声が聞こえない暁であってほしい。」の意と解され、いずれも「願望」を「表出」する用法である。

- (28) (祖父) へ実もなんぢらが、心ざしのほどもやさしひ程に、さあらは名を付

てやらう、何とがなつけうぞ、 (脇狂言之類 さいほう 上二一四頁)

(29) (教え手) へせうやうがなさに、さやうにしたが、誠にみぐるしひ、何とがな、おもひ出た、ひつしきを付させてやらふ (智類山伏類 ひつしき智 上三四二頁)

例 (28) (29) は「がな」の用例である。「がな」は希望を表す原義を失い、疑問詞に付いて「何と名付けよう。」「何とかしよう。」という不定の意を強調する、希望表現と無関係な用法である。本書にこのような用法の「がな」は多数見られる。

5、「なん」の用法

次に、「なん」の用法を見る。本書に「なん」は一例のみ見られる。

(30) (浅鍋売) へあふみなる、つくまの祭とくせなん、つれなき人のなべの数みん (脇狂言之類 なべやつばち 上二二頁)

例 (30) はせりふの歌における用例である。「早く祭りをしてほしいものだ。」の意を表し、他者に対する「希求」を「表出」する用法である。

6、「かし」の用法

次に、「かし」の用法を見る。本書に「かし」が三五例見られる。いずれも動詞の命令形について、強い希望の意を表す。

(31) (加賀) へうへとうはいつも、お正月で御ざる程に、くるしうあるまひと存る、よいつれも御ざれかし、同道いたいてまいらふに、まづ是につれをまたふと存る (脇狂言之類 餅酒 上四二頁)

(32) (雑領の者) へさやうのしさいは、今うけ給はつてござるよ、きちがあれかし、おてがらをみよう (大名狂言類 きんや 上二六六頁)

例 (31) (32) は、「よい道連れがあつてほしい。」「雑がいてほしい。」の意を表し、

大藏虎明本狂言集における希望表現について

「願望」を「表出」する用法である。「かし」自体に希望の意はないが、命令形に下接することによって命令の意味をやわらげ、希望の意を表現するものになったものと解釈する。

7、「たまへ」の用法

次に、「たまへ」の用法を見る。「たまふ」の命令形「たまへ」は基本的には命令表現であるが、神仏・天皇などに向かつて用いる場合や明らかに相手に願う場合は希望表現と捉えることができる。本書における希望表現と認められる「たまへ」は二三例見られる。

(33) ふしいろへ雨の宮風の宮、北にさいくうかゞみの御社、あまの岩戸は大日如来、あさまのだけにくうさう、そうじて日本の大小の神、おどろかし奉り、只今の黒天、某がかたへ御影向なさる、やうにまもらせ給へ、きんじやうさんぐさいはい、く (智類山伏類 ねぎ山ぶし 上四一四頁)

(34) (妻) へはるかなる、おきにもいしの有物を、ゑびすのごせのこしかけのいし (妻) へおがらこそめでたうおりやらしませ、いのちながうちうようのぞひて、まもらせ給へ (女狂言之類 いしがみ 中二三七頁)

(35) へくらまの大悲多門天は、(略) かたしけなき衆生は是をみるよりもかうへを地につけ礼したてまつり へたからをわれにたひ給へと申上は (万葉類 松はやし 下二〇二頁)

例 (33) (34) (35) は明らかに神仏に祈る表現であり、「お姿を現してお守りくださるよう。」「命長くお守りくださるよう。」「宝を私達にくださいますように。」の意と解され、いずれも「希求」を「表出」する用法である。

8、「ほし」「ほつす」「欲」の用法

次に、「ほし」「ほつす」「欲」の用法を見る。本書に「ほし」は四一例(そのうち派生語「ほしがる」が八例、「ほしき」が一例)、「ほつす」は三例、「欲」は

二例見られる。

- (36) (太郎冠者)「それは尤で御ざる、又ざつくとときでおどす物が有と申されたが、それがほしう御ざる
(脇狂言之類 よろい 上七五頁)

例(36) はせりふにおける用例である。「その鎧がほしい。」の意を表し、話者の「願望」を「表出」する用法である。

- (37) (太郎冠者)「それはかたじけなふござる、只今まいるもべち事でもござなひ、あすはれなきやくがござるが、よひ酒がほしうござるが、こなたの酒をおこひてくたされうか
(鬼類小名類 ちどり 中一五二頁)

- (38) (売手)「おんでもなひ事、今なりともじゆもんとなへてうては、何なりともほしひ物をうち出すがきどくじや
(脇狂言之類 財のつち 上八七頁)

- (39) (女)「やい／＼なんぢがつまがほしくは、西門にたちたをつまとさだめひ、
(女狂言之類 いなばだう 中一七七頁)

例(37)(38)(39) はせりふにおける用例である。「よい酒がほしいが」、「ほしい物を出すのが」「妻がほしいならば」、「の意を表し、いずれも「願望」を「説明」する用法である。

- (40) (ちんば)「そうじて竹の子にかぎて、人がほしがる物じやによつて、ゆだんがならぬ、
(集狂言之類 竹の子 下八四頁)

- (41) (毘沙門)「なをもしうとに、ほしがりて、かぶとをぬひで、しうとにとらせし
(輦類山伏類 ちびす毘沙門 上三二九頁)

- (42) (畠主)「中々きひてござるが、牛の子とはへつかくで御ざるに、さては〇子をほしさにむりを申しかけた
(集狂言之類 竹の子 下八六頁)

例(40) はせりふにおける用例であり、例(41) は節付けの部分における用例である。接尾語「がる」がついた、外から見える第三者の希望に用いられ、「人

が手に入れたいものなので、「舅にしたくて兜を脱いて、」の意と解され、例(42) は「牛の子ほしさに無理を言った。」の意と解され、「さ」を用いた用法でいずれも他者の「願望」を「説明」する用法である。

- (43) (住持)「でんぼうぜんとは、此ほうをほつする事を云、
(出家座頭類 ふせなひきやう 中三六四頁)

例(43) は住持の説法の文言である。「いわゆる伝法善とはこの仏法を望んで伝えることをいう。」の意を表し、「ほつす」は動詞用法である。

- (44) (太郎冠者)「ききは夏かやをもつらせひでねさするげなが、そのやうな
(女狂言之類 やせ松 中二九四頁)

- (45) (山賊)「やれおのれは、よくのふかひ事を云、わがだうふぐをとつたらはよひは、長刀も刀もそこにおいてゆけ
(女狂言之類 やせ松 中二九四頁)

例(44)における「どうよく」は「貪欲(どんよく)」の転であり、「非常に欲が深いことをするものか。」の意、例(45)は「欲が深いことを言う。」の意と解され、いずれも名詞用法である。

9、「ねがふ」「願」の用法

次に、「ねがふ」「願」の用法を見る。本書に「ねがふ」は一七例、「願」は二例見られる。

- (46) (福の神)「惣じてたのしうなるは、もとでがなふてはならぬ
(脇狂言之類 福の神 上三六頁)

- (47) (閻魔王)「是は八まんちごくにすむ鬼にて候、人間が利根になり、ごしやうをねがふによつて、地ごくのがしんもつての外な、此分にてはかんにがならぬ程に、しやはのたて山へ行、
(鬼類小名類 ちごくぞう 中四五頁)

例(46)(47)は、「元手をお願いする。」「来世の幸福、極楽往生を願うので、」の意と解され、「ねがう」は動詞用法である。

(48) (夫)「そなたをよびいたす事、別の事でもなひ、かやうに亡目となる事、そなたのねがひであつた程に、さぞ満足であらふ

(女狂言之類 かはかみ 中一九一頁)

(49) (夫)「中々、たゞいまも申ごとく、かた／＼のやうなるしゆせうな御出家にあふた事が御ざなひ、是はそつじな申事なれ共、方／＼のやうな御出家にあふて、ほつたいいたしたひとぞんじてござあるに、ねがひがかなふて御ざるほどに、れうじながら剃刀をあて、下されひ

(出家座頭類 しゆじやう 中三四一頁)

例(48)(49)は、「あなたの願うことであつたので、」「出家の願いが叶いますので、」の意と解され、「ねがひ」は動詞連用形の名詞用法である。

(50) (住持)「たゞかれをみ是をきくに、かう／＼にはづれたる事有まじひ、けふのせつはう是までなり、ぐわんにしくどくふさうお一切がとうよ衆生皆具成仏道

(出家座頭類 なきあま 中三二七頁)

(51) (すつば)「一たいは、むにぢさうとて、ほんぐわんをもつて、がきたうのくげんをたすけ給ふ

(出家座頭類 六地藏 中三六一頁)

例(50)(51)は字音語の「願」の用例である。例(50)は漢文廻向文の音読で、「ねがはくはこの功德を以て普く及ぼし、我らと衆生みな成仏するように。」と訓読され、「ぐわん」は原文では助動詞用法で「願望」を「表出」する用法である。例(51)における「ほんぐわん」は仏教用語で、「神仏にかける願」の意を表し、これは名詞用法である。

10、「のぞむ」「望」の用法

次に、「のぞむ」「望」の用法を見る。本書に「のぞむ」は二四例、熟語「所望」は二五例、「本望」は三例見られる。

大藏虎明本狂言集における希望表現について

(52) (太郎冠者)「又すまふをもとらせられうならばか、へませう (蚊の精)「それはのぞむところでござる、すまふすきでござらはなんにもかまひませぬ参らふ

(大名狂言類 かすまふ 上一九七頁)

(53) (狐の神)「それこそふくべの神の望所なれ、急ひでみきをまいらせ候へ、ふつきゑいぐわにさかへさせうぞ

(脇狂言之類 はちた、き 上一四二頁)

例(52)(53)における「のぞむところ」「望所」は表記が異なるが、「それは望むところでございます。」「神の望むところですよ。」の意と解され、「のぞむ」は動詞用法である。

(54) (夫)「身共がのぞみには、たきのみがしたひと思ふが、のませてくれまひか

(女狂言之類 河原太郎 中二五四頁)

(55) (茄子の精)「われはなすびの精にて候が、かた／＼の望のこたく罷出て候、

(集狂言之類 このみのあらそひ 下九一頁)

例(54)(55)は「私の望みは、滝の水を飲むようにしたい」「あなたの望みのように来ました」の意を表し、「のぞみ」は動詞連用形の名詞用法である。

(56) (鬼)「やすひ間の御所望なり、く、く

(鬼類小名類 せつぶん 中四〇頁)

(57) (男)「罷出たる者は、此あたりの者でござる、某笛にすひて御ざあるにより、笛の音をいれふと存て、毎夜曉此在所のはづれへ罷出て、笛をふきまらすれば、吹度ことに、いづくともしらぬ女が参て、色々の笛を所望致て

(女狂言之類 ふきとり 中二五五頁)

(58) (舞)「つしま、ゆりなど所望する」

(女狂言之類 ふきとり 中二五五頁)

例(56)(57)(58)は熟語「所望」の用例である。例(56)は節付けの部分における用例であり、「たやすいお望みである。」の意と解され、これは名詞用法である。例(57)はせりふの、例(58)は説明の書き入れにおける用例であり、「様々

な笛を注文してお吹かせになる。「舞、つしま、ゆりの笛の楽曲を願ひ望む。」の意と解され、これらは動詞用法である。

(59) 入又かきのもと(本)のきそ(紀)うは(正)、そめ(染)どの(殿)、きさ(後)きを(本)こひかねて(賀茂)、かものみ(御手洗)たら(洗)し川に身をなげ、あを(音)きお(鬼)にと(後)なつてそのほん(本)まう(望)をと(後)げらる(後)、

(女狂言之類 枕物狂 中二二六頁)

(60) (出家) 入か様に候者は、はる(遠)か遠国の、かい(戒)し(若)や法師にて候、某いまだかいだ(戒)んをふまぬ事口惜と存じ、都に上り比叡山にて、かいだ(戒)んをふみ、只今本国へ罷(去)下る、急いでくだらばやと存る、某も日頃の本望をと(後)げて御(尊)ざる、

(出家座頭類 名取川 中三三〇頁)

例 (59) (60) は、「本来の望みを遂げられました。」「以前からの望みを遂げました。」の意と解され、「本望」は名詞用法である。

11、「いのる」「祈」の用法

次に、「いのる」の用法を見る。本書に「いのる」は一〇八例、熟語「祈念」が九例、「祈誓」が三例、「祈禱」が一二例、「きせい」が八例見られる。

(61) (毘沙門) 入おそ(推)ひす(推)いかな、びしやもん天王であるが、汝らが富貴(富貴)になしてくれよといのる(祈)ほどに、

(脇狂言之類 連歌毘沙門 上三三三頁)

(62) (禰宜) 入身共はいま、で物をいのつた事(祈)がおりなひ

(智類山伏類 ねぎ山ぶし 上四一三頁)

例 (61) (62) は、「あなたは富裕にしてくれと祈るので、「私は今まで物を祈った事がない。」の意と解され、「いのる」は動詞用法である。

(63) (男) 入是は津国(津)あし(屋)やの里の者にて候、あまりに浮世(トセイトモ云)を送りかね、ひえ(比叡)の山の三面の大黒は、いつれの大(大)こく(小)よりもれいげん(懸)あらたにて、いのり(祈)をかけ申せは、程なく富貴に守り給ふと申程に、ひえいざん(比叡)へのほり、

(脇狂言之類 ゑひす大黒 上二七頁)

(64) (をとこ) 入又それ(見)にみえさせ給ふは、いかやうなる御かたにて候ぞ(大)く(動)わん(請)じやういたせと示現をおろしてある間、富貴(富貴)になさんと思ひ、

(脇狂言之類 ゑひす大黒 上二八頁)

例 (63) (64) は、「比叡山の三面の大黒にお祈りをする」と、「あなたが祈りかけた比叡山の大黒天であるが、」の意と解され、「いのり」は動詞連用形名詞法である。

(65) (座頭) 入われ観音に参籠申、祈念(祈念)をするにかくばかり、もしくさやうの人やらん

(出家座頭類 ござざとう 中四二四頁)

(66) 入にしの宮へ参て、ゑひす三郎殿へ祈誓(祈誓)をして、吉日をもつて、くわんじやうせよとの御夢想にて候間、西の宮へ参り祈念(祈念)を申てあれば、是も吉日を以て勧請せよとの御つげにて候、

(脇狂言之類 ゑひす大黒 上二七頁)

(67) (山伏) 入おのれは(危)多しるまひ、惣じて山伏といふ物は、なんぎ(難)やう(苦)く(行)ぎやう(行)をして、天下の御祈禱(祈禱)をする、其上目の前にてとぶ鳥を(祈)いのり(祈)おとす、

(智類山伏類 犬山伏 上四〇一頁)

(68) (夫) 入其故は、かりそめにやみめを煩(煩)て御(不)ざるが、ぶやう(業)じやう(生)にいたひて、かやうに罷なつて御(不)ざる、爰(地)に河かみのぢ(地)そ(地)うと申て、げんぶ(地)つし(地)やが御(不)ざるが、あれへまいつて、目のあくやうに(祈)きせい(祈)を致さうと存る、

(女狂言之類 かはかみ 中一九一頁)

例 (65) (68) における「祈念」「祈誓」「祈禱」「きせい」はいずれも字音の熟語で神仏に関する希望を表す名詞用法である。

四、おわりに

以上、大蔵虎明本狂言集における希望表現の構成と用法を考察してきた。希望表現の構成形式には、助動詞「まほし」「たし」、終助詞「ばや」「もがな」「なむ」「かし」、慣用形式「たまへ」、形容詞「ほし」、動詞「ほつす」「ねがふ」のぞむ「い

のる」が見られる。その構成が多様にわたるが、量的に「たい」「ばや」「いのる」が圧倒的に多い。

各構成形式の用法については、類義の「まほし」と「たし」が併用されているが、「まほし」は二例のみで、話者の「願望」を直接「表出」する用法である。「たし」は用例が多く見られ、その対象を表す助詞に「を」とともに「が」も使われる。すべて「願望」を表し、それを直接「表出」する用法と「説明」する用法があり、希望表現の中心的存在になっている。「ばや」の用例も多数あるが、「願望」の意を表す用法より意志を表す意と取るのが妥当であろう。「もがな」は「願望」を「表出」する用法であるが、同源の「がな」は不定詞に付いて不確定を強調する意を表す。「かし」は命令形に下接することにより、命令の意をやわらげる希望表現となっている。「給ふ」の命令形「給へ」は天皇、神仏などに対して命令の意から転じて希望表現となっていることに通じる用法である。「ほし」は「願望」を「表出」する用法と「説明」する用法とが見られる。「ねがふ」「のぞむ」「いのる」は動詞用法と動詞連用形の名詞用法が見られ、また字音の熟語形式も見られ、希望表現の周辺的存在と認められる。

大藏虎明本狂言集においては、「まほし」の用例が極端に少なく、希望表現の中心は「まほし」から「たし(い)」に移行しており、本来希望表現を表す「ばや」は希望表現から意志表現に、「がな」は希望表現から不定の意を表す用法になり、動詞命令形に接続する「かし」が強い希望を表す表現に用いられる。このような希望表現の大きな変化は、日本語における、古代から近代への変遷の一端を示すものといえよう。

【注】

(1) 柴田昭二、連仲友「希望表現の通史的研究 序説」『香川大学教育学部研究報告 第1部第109号』平成12年3月。

(2) ここでいう希望表現とは、人の願望に関し、一種の心情的表現形式である。また、その下位分類として、話者自身の動作・状態に対して向けられるものを「願望表現」、他者の動作・状態に対して向けられるものを「希求表現」と称する。さらに、希望を発する場合を希望の「表出」、それ以外の問い質しや過去などの場合を希望の「説明」と称する。現代日本語においては、「願望」は「〜たい」の形で、「希求」は「〜てほしい」の形で表現するのが最も一般的である。したがって、一人称現在形形式「一人称〜たい」「一人称〜てほしい」はそれぞれ「願望」、「希求」

の「表出」であり、一人称の過去形「一人称〜たかった」「一人称〜てほしかった」、二人称形式「二人称〜たいか」「二人称〜てほしいか」、三人称形式「三人称〜たがる」「三人称〜てほしいがる」などの形式は、「説明」にあたる。

(3) 注(2) 参照。

(4) 注(2) 参照。

(5) 注(2) 参照。

(6) 注(2) 参照。

(しばたしょうじ

れんちゅうゆう

香川大学名誉教授

広島市立大学客員研究員

(二〇二二年一月三〇日受理)